

策士な紳士と極上お試し結婚

女の子なら誰だって、一度は結婚を夢見たことがあるはず。

純白のウェディングドレスを着て、旦那様になる人と腕を組んで微笑みながら写真に収まる。

そしていつも笑いが絶えない幸せな家庭を作るのだ、という人はかなりいるのではないだろうか。

しかしながら、私、宗守沙霧<sup>むねもり さぎり</sup>は、幼い頃からそんな夢を見たことが一度もない。

それというのも――

「ごめん、何度も聞いて本当に申し訳ないんだけど、宗守さんのお母様って何回離婚したんだっけ？」

同じ事務員で勤続三十年の大先輩である香山<sup>かやま</sup>さんが、申し訳なさそうに尋ねてくる。彼女にこれを聞かれるのはおそらく三回目か四回目だ。

「五回です。バツ五」

私は特に気にせず、玉子焼きを食べながら淡々と答えた。

今は職場の同僚と休憩室でお昼を食べている最中。

「そうだった。ごめん、言いづらいことまた聞いちゃって……確か、四回か五回だったような気がしてただけど、気になりだしたら聞かずにはいられなくなっちゃって」

しゅん、としている香山さんは五十代の既婚女性。大学生の息子さんの学費のために、ご夫婦で節約しながら貯金に励んでいる真つ最中だという。

高卒でこの払田工業に入社した私に、事務や経理といった仕事の全てをたたき込んでくれたのは香山さんだ。たたき込んだといっても、スパルタではなく優しく丁寧に教えてくれた。

そのおかげで仕事が好きになり、入社して十年間、辞めようと思ったことは一度もない。そんな香山さんに、私は笑顔で首を横に振った。

「いえ、まったく問題ありません。私もいまだに何回だったか分からなくなることがあるので……」自分で作った玉子焼きをもぐもぐと咀嚼していると、香山さんが感嘆のため息を漏らす。

「それにしても五回も結婚と離婚ができるなんて、驚くわあ。で、そのお母様はお元気？」

「はい、元気です。まあ……母は根っからの恋愛体質ですから……常に恋をしていないといられないというか、気持ちだけはいつまでもティーンみたいな人なので」

ティーン、というたとえに香山さんが感心する。

「……さすがね……じゃあ、娘である宗守さんはそんなとこどうなの？」

香山さんの問いかけに、私は笑顔できっぱり断言する。

「私は結婚願望がないので、ずっと一人でいいです」

そう、私は母とは違う。結婚なんてしないとずっと前から決めている。

私の人生は、超恋愛体質な母、由子のせいで大いに狂わされたといっても過言ではない。

私が二歳の時に父と離婚した母は、以来、再婚と離婚を繰り返してきた。その数五回。

父と呼ぶ人が代わる生活に、幼い頃は特に疑問を抱かなかったが、小学生にもなるとさすがにおかしいと思うようになる。何故うちはお父さんが代わるのだろう、と。

だけれど、それを問う私に泣きながら謝ってくる母を前にすると、そんな生活はもう嫌だ、とは言えなかった。離婚してから、母は私を保育所に預けて働いていたが、夕方までのパート勤務で得られる収入だけでは生活がかなり苦しかったのだろう。

『沙霧、ごめんね。お母さんのせいでお前に苦勞をかけて。でも、お父さんがいれば、生活がだいぶ楽になるの。だから許してくれる？』

『……うん、分かった』

他になんと言えればいいのか。子供の私には浮かばなかった。

しかし私が高校の頃、三度目の離婚をして一年かそこらで、四度目の結婚をされると言い出した母に、私は反発した。離婚して一年しか経っていないのに、懲りずにまた結婚しようとする母が、どうしても理解できなかつたからだ。

当時は思春期真っ只中。私といる時は優しい母が、恋人を前にした途端あからさまに女の顔にな

るのが、嫌でたまらなかつた。

加えて四度目の義父は、母が居ない間に私に手を出そうとしたとんだゲス野郎で、私の我慢は限界に達した。私は義父のいない時に、母へ「もう一緒に住めない」と宣言した。もちろん母は驚き、そんなこと言わないで一緒に住もうと引き止めてきた。でも、義父に手を出されそうになったと伝えると母の表情が一変した。

『嘘……それ、本当なの……？』

さすがにすぐには信じてくれなかつたけど、最終的にマンションを出ることを許してくれた。そうして私は、高校三年生の途中から、母方の祖父母の家に身を寄せることになった。

祖父母はずっとここにいていいと言ってくれたが、高齢の二人に苦勞をかけたくなかつたのと、早く自立したいと思っていたこともあり、高校卒業と共に家を出て就職した。以来、誰の手も借りずに一人で生活をしている。

その間に母は四度目の離婚をし、五度目の結婚をした。だが、やはりこれも長くは続かず私が二十五の時に離婚した。しかし五度目の義父が飲食店をいくつか経営する資産家で、母は今、財産分与でもらった資産を元に小料理屋を営んで生計を立てている。

——これに懲りて、もう結婚はしないでくれたらいいんだけど……いや、無理だなあの人は。

今となつては年に数回くらいしか連絡を取り合わないが、直近の電話で好きな人がいるようなことを言っていた。所詮、私が何を言つたつて聞きやしない、そういう母なのだ。

この先も、きつと母は変わらない。でも、私はあはならない。

恋愛に振り回されるのは嫌だし、すぐに破綻する結婚もしたくない。だから私は、誰にも頼らず、一人で生きていくと決めたのだつた。

食べ終えた弁当箱を洗ってバッグに入れ、少しの休憩を挟むと午後の業務が始まる。

私が勤務する株式会社払田工業は、国産自動車の部品を製造する社員数六十名ほどの中小企業だ。高卒で採用されて以来、私はこの会社で正社員として、経理事務を担当している。

自分の席で、午前に引き続き売上伝票のチェックをしようとすると、社長である払田一郎氏が私に近づいてきた。

「宗守さん、ごめん、ちょっと社長室に来てくれる？」

「はい」

これまで社長室に呼ばれたことなど一度もない。他の人がいる場所では言えないようなことなのかと心の中で首を傾げつつ、私は席を立った。

今から三十年ほど前にこの会社を創業した社長は現在六十代半ば。跡継ぎとなる息子の常務と共に我が社の経営を担う社長は、つるりとした頭がトレードマークの、温厚で人情味に溢れた人だ。私は社長を悪く言う人を見たことがない。

そんなことを考えながら、私は社長の後について社長室に入った。

ドアを閉め、社長に勧められるまま茶色いレザーのソファに腰を下ろす。ガラステーブルを挟んで私の前に腰を下ろした社長が、白い封筒から何かを取り出した。

「仕事中に悪いね宗守さん。実はね、君に縁談が来てるんだよ」

「え？」

社長が封筒から取り出した物を私に差し出す。

いつもなら社長に手渡される物はすぐに受け取るのに、今回に限っては一瞬躊躇ちゆうちゆうしてしまった。それくらい、私にとっては寝耳に水の話だった。

「じゃ、社長……私の聞き間違いでしょうか。今、縁談と聞こえたような……？」

「うんそう、縁談。ほらそれ。お相手の写真と釣書」

「えッ……!! いやあの、社長、私は結婚する気はない……」

「うん、宗守さんが独身主義なのは知ってる。でも、今回はちよつと事情があつてね……とりあえず、写真と釣書を見てくれないかな」

「……では、一応……」

神妙な顔をする社長を前にしたら、きっぱり拒絶なんかできなかった。私は仕方なく、差し出された冊子を受け取り、それを開く。

目に飛び込んできたのは、端正な顔をしたスーツ姿の男性だった。しかも、ちよつとびっくりするぐらいのイケメン。

目はぱつちりとして眉と目の間が狭い、彫りの深い顔立ち。鼻梁びりょうの通った鼻は高く、口元もバランスがいい。まるでファッション誌のモデルばりの美男子に、私は目をパチパチさせる。

——なんでこんな人が私みたいな女と見合いを……？

こんなイケメンならお見合いなんかしなくていくらでも相手がいそうなのに。

「あの、本当にこの方が私との見合いを望んでいらつしやるのですか……？」

これに対し、社長が困り顔で「そうなんだよ」と頷いた。

「私も、どうしてこの話が宗守さんに来たのかよく分らないんだ」

「ですよね？ だって、彼女なんていくらでもいそうな顔立ちですよ、この方」

「顔だけじゃないんだよ。経歴を見てごらん。すごいから」

社長が腕を組みながらため息をつく。社長にこんな顔をさせるほどのすごい経歴ってどんなだ。

「経歴、ですか……？」

私は一旦写真をテーブルに置くと、渡された釣書に目を通す。そこに記されていたのは、にわかには信じがたいキャリアの数々だった。

「あの……なんですか、この経歴……どこぞの御曹司かっくらいすごいんですけど……」

国内最高峰の大学を卒業後、海外の大学に留学してMBAを取得。帰国後はうちの主要取引先である自動車部品を製造する大手サプライチェーンの重役に就任とある。それもまだ三十二歳という若さで、だ。

釣書を持つ手がブルブルと震えてくる。それくらい、私の周囲どころか、完全に別世界に住んでいる人だ。

そんな人との縁談がどうして私に、と、疑問より不安の方が大きくなる。

「実際、御曹司なんだよ。この方のご実家、かなりの資産家だから。しかもおじい様がうちの取引先の創業者でね。現社長の久宝くほうさんは彼の父にあたる。確か宗守さんは一度会ってるはずだよ。社長と一緒にうちに来たことあるし」

「久宝社長がいらしたのは覚えてますけど、この方に見覚えはありませんが……」

今年の初めくらいに、久宝社長が来ると社内がバタバタしていたのは覚えている。お付きの社員も数人いたが、その中にこんな人はいなかった。

「あの時は、写真と髪型が違ったかな。それと眼鏡もしていたかもしれないんで、宗守さんが覚えていないのも無理ないかもしれん。それでだね……非常に頼みづらいことなんだが……」

ずっと申し訳なさそうな表情をしていた社長が、さらに肩を落とす。その様子を見ただけで、何を言われるのか容易に想像できた。

「この方とお見合いをしると、仰おこるのですね？」

はつきり言うと、社長が頭を下げた。

「申し訳ない……宗守さんの事情は私も知っているから、一度は断ったんだ。けどどうしても引いてもえなくて……とにかく君と直接話をする機会をくれと、その一点張りだ」

ただの事務員である私に頭を下げる社長を見ると、やるせない気持ちになる。

高卒でなんのスキルもない私を、この会社に入れてくれた社長には、ずっと感謝していた。その社長が頭を下げてまで頼む以上、私に断るという選択肢はなかった。

「分かりました」

私が返事をすると、社長が弾かれたように頭を上げた。

「い……いいのかい？ 宗守さん」

「会うだけなら問題ありませんので。でも、私の気持ちはきちんと相手にお伝えします。それでも、よろしいですか？」

「も……もちろんだ。それで相手がこの話をなかったことにしてくれと言ってくるのであれば、それはまったく問題ないよ」

「それを聞いて安心しました。では、私が直接この方に会って事情を説明してきます」

相手は社会的に立場のある男性だ。結婚したくないと言う女性に無理矢理求婚などしないだろう。しかし、その考えは甘かった。

なんせお見合い当日に私の前に現れた男性は、想像していたよりもずっと一筋縄ではいかない人だったからである。

見合いを了承したのち、先方から指定されたお見合いの場所は、私のような庶民には一生縁がないような高級料亭だった。

場所を聞いた時、まず頭に浮かんだのは「何を着ていけばいいの!？」だ。それほど私とは縁遠い場所だった。

香山さんに相談して購入した淡い色のフォーマルワンピースで家を出た私は、料亭の入り口の前で一度立ち止まり、数回深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。

——落ち着け、落ち着け。今から会う相手は、別に鬼とか妖怪じゃなく、同じ人なんだから。きつと話せば分かってくれる。

とはいえ、同じ人間でも話を通じない人をこれまで山ほど見てきている。そのことが頭を掠める度、怖<sup>お</sup>じ気<sup>け</sup>づきそうになるが、意を決し料亭の敷地に足を踏み入れた。

「ようこそいらつしやいませ」

店の引き戸を開けると、すぐに奥から着物を着た綺麗な女性が近づいてきて、私に微笑みかける。「あつ、あの……久宝で予約が入っていると思うのですが……」

「久宝様でございますね。お待ちしておりました、どうぞこちらへ」

しどろもどろになりつつ先方の名を出すと、すぐに個室へ案内される。

「こちらのお部屋です、どうぞ」

「ありがとうございます」

私がお礼を言うと、その女性が部屋の奥に「お連れ様がお見えになりました」と声をかけた。

その瞬間、すでに先方がこの場にいることを知り、ドツ!! と心臓が跳ねた。

——嘘、もう来てた!!

待ち合わせに指定された時間よりもだいぶ早く到着したのに、まさか相手の方が早いだなんて。慌てて部屋の中を覗き込むと、畳が敷かれた和室の奥にいた男性が立ち上がるのが見えた。

「すみません、お待たせしてしまって。く、久宝さん……でしうか」

「はい。宗守沙霧さん。お待ちしておりました」

黒々とした短髪にかつちりとしたスーツを身に纏<sup>まと</sup>い私に微笑みかけるのは、まごうことなき写真の男性——久宝公章<sup>きみあき</sup>氏だ。写真で見た時も美男子だと思ったが、対面するとそのイケメンぶりに圧倒される。

釣書によると、年齢は三十二歳ということだが、二十代と言われても信じるくらい肌が綺麗で若々しい。体型はスマートで、パツと見た感じ、身長はかなり高い。百八センチはあるだろうか。「どうぞ、そちらに。今日は急なお願いにもかかわらずお越しくださり感謝いたします」

にっこり微笑む久宝さんにつられ、私も笑顔を作る。もしかしたら、引き纏ひきまとっているかもしれないけど。

「いえ……こちらこそ、今日はよろしくお願いします……」

勧められるまま、私は彼の向かいの席に腰を下ろした。

予め用意されていたらしく、目の前の大きなテーブルには二人分とは思えないほどの料理が並んでいる。それも色彩豊かな美しいお椀ばかり。

久宝さんの美男子ぶりにも驚いたが、このお料理も私の度肝どぎもを抜く豪華さだ。

——うわわわ……す、すごい……こんなの初めて見た……

ついゴクン、と喉のどを鳴らしてしまう。

「何を飲まれますか。ここにはいいお酒も揃そろっていますが」

メインのお料理はこれから来るということで、飲み物のメニューを手渡される。

「いえ、私はお茶で」

お酒に弱いわけではないが、酔っぱらって何かしでかしてもしたら大変だ。

そう言っつてメニューを返すと、久宝さんが少しだけ残念そうに微笑んだ。

「そうですか。では私もお茶をいただくことにしましょう」

オーダーを聞いた店の女性が部屋を出ていくと、久宝さんと二人きりになってしまう。

かろうじてテーブルを挟んで向き合っているものの、会社の同僚以外の男性と二人きりで食事を

するなど初めての経験だ。落ち着かなくても仕方がない。

しかも相手は大企業の重役……もし粗相そそうをしたらと……私は今、かつてないほど緊張していた。

視線を落として黙り込んでいると、先に久宝さんが口を開いた。

「さて……宗守沙霧さん。今回は急な話でさぞかし驚かれたのではないですか」

「はい。すごく驚きました」

間髪かんぱを容れず返事をしたら、久宝さんがクスツと笑う。

「でしようね。すみません。ああ、せっかくなので食事をしながらお話ししましょうか。今日は私

の方で勝手に選んでしまいました……」

「あっ、ありがとうございます！ すごく美味おいしそうなものばかりで驚いていたところです」

「この店は何を食べても美味おいしいので、私も楽しみにしてきました。さ、冷めないうちにごうぞう」

「では……いただきます」

そう言っつて、まずは小さなグラスに入った食前酒をいただく。これくらいの量なら酔うことはないだろう。

「……ん、梅酒ですね」

「ええ。とても口当たりのいい梅酒だ」

梅酒を口に含みながら、目の前にいる男性をチラリと盗み見た。



グラスを掴む骨張った指に男の色香を感じる。少し伏せた目は瞳も長く形がいい。アーモンドアイというのはこういう目のことを言うのかもしれない。

——それにしても、本当に綺麗な男の人だなあ……なんでお見合いなんかするんだらう……

こんなイケメンで地位も名誉もお金もある人なら、お見合いなんかしなくても女の人の方から近づいてきそうなものなのに。

頭の中を、何故とどうしてでいっぱいになっていると、久宝さんと目が合った。

反射的に目を逸らしてしまい、笑いを含んだ声が聞こえてくる。

「……そんなにおびえなくてもいいのに」

「お、おびつ……!?! すみません。こういう場合は初めてなので、正直どういう風にしたらいのかわからなくて。し、失礼なことをしていたらお詫びします……」

「失礼なことなんて、まったくくないですよ。可愛いなと思って見ていました」

——か、可愛い……!?!

言われ慣れていない言葉に、心底リアクションに困ってしまう。

「あの……そ、それよりもですね……何故、久宝さんは私とお見合いをしようと思われたのでしょうか？ 私、久宝さんとお会いしたことって、ありませんよね……?」

勢いに任せて、思っていたことを聞いてしまった。

しかし、久宝さんは静かに首を横に振った。

「いいえ。会っていますよ。覚えていませんか？ こういう男を」

そう言うなり、久宝さんは前髪を横に流し、ジャケットの胸ポケットから取り出した銀縁眼鏡をかける。その姿を見た私は、思わず「あっ」と声を上げる。

微かにだが、見覚えがあった。

——この人、いた……!!

久宝社長が来社した時、付き添いで来ていた数人の男性の中に、こういうビジュアルの人がいたことをうっすらと思いつく。

「思い出しました？」

私の反応を見て久宝さんが嬉しそうに口角を上げる。

「も……申し訳ありません！ 今日眼鏡をしていらっしやらないし、髪形が違ったので気がつきませんでした」

顔を覚えていなかったことを心から申し訳なく思い、深々と頭を下げた。しかし、久宝さんは笑顔のままだ。

「謝らないでください。あの時、私は社長の隣に座っていただけなので、覚えていないのも無理はないのです。それにあの姿で人前に入るのは勤務中のみなので……あ、どうぞ、食事を進めましょう」

「は、はい。では……」

久宝さんに勧められ、先付けに箸をつける。肌色をした肝のようなものをドキドキしながら口に入れた。次の瞬間、口の中に未経験の味わいが広がる。

「……！ これ、すごく美味しいですね……なんていうか、とってもクリーミー……」

「鮫肝ですね。確かに濃厚で、クリーミーです。鮫肝は海のフォアグラと言われているみたいですよ」

久宝さんが美しい所作で鮫肝を口に運ぶ。それを見て、私も再び箸を動かした。

「そうなんですか。私、二十八歳にして初めて食べました。あ、それで、話の続きをしてもいいでしょうか」

「どうぞ？」

「先ほどのお話からでは、何故、私に今回のお話が来たのか分からないんですが……」

「それもそうですね」

鮫肝を食べていた久宝さんが小さく頷く。

「そもそも、私が社長について払田工業さんへ行ったのは、あなたに会うためだったんです」

「……私に会うため、ですか？」

「ええ。父に宗守さんのことを聞いてね」

「はっ？」

私の頭の中で、過去に久宝社長と交わした言葉や行動が激しく入り乱れる。

何か粗相をしてしまったのではないか、失礼なことを言ってしまったのではないか。そのことで頭がいっぱいになると、今度は沸々と不安が湧いてくる。

私の異変に気がついた久宝さんが慌ててフォローの言葉を口にした。

「ああ、違います。父はあなたにとってもいい印象を抱いているんですよ。私が聞いたのは、父と歴史の話で盛り上がった、とか……」

思いもしなかった話になって、私は「へっ」と気が抜けたような声を出した。

「……確かにお茶を持って行った時、どういう流れかは忘れましたが、日本の歴史の話になりました。私も歴史好きなので、楽しくお話しさせていただいたのは記憶にあります……」

「それが父の中では強く印象に残っているようですね。若くて可愛らしい女性なのに、非常に落ち着いていて感じがいいと。それからというもの、父が私によく言うのですよ。払田工業の事務員の女性ならお前に合うんじゃないか、とね」

「そんな……ちょっとお話しただけでそれは……ないんじゃないかと……」

さすがに本気で困惑する。さつきから箸も止まらなかったままだ。

「もちろん、私も父の言うことを鵜呑みにはしませんでした。ただ、あまりにうるさいので、そこまで言うあなたを、一度この目で見してみようと思ひましてね。新年の挨拶を兼ねて払田工業へ視察に行くという父に同行したのですよ」

「……なるほど。そういう流れでしたか……」

まだ核心にはほど遠いけれど、何故私に声がかかったのか少しだけ理解できた。それで多少気の緩んだ私は、止まっていた箸を動かし、お料理を口に入れる。それにつられるように久宝さんも箸を動かした。

「お食事中失礼いたします」

二人揃って、無言でもぐもぐしていると、さつき対応してくれた女性が入ってきた。注文したお茶と一緒に、立派な海老の天ぷらと美味しそうな牛肉のステーキなどをテーブルに置いていく。

ただでさえたくさん料理が並んでいるのに、更に美味しそうなものが追加され、言葉が出てこない。

「ま、まだこんなに……食べられるかな……」

「ふふ。どうぞ、時間はまだまだありますので、ゆっくり召し上がってください」

「あ、ありがとうございます。……ただ、そろそろどこでどうなってお見合いという話になったのか教えていただけませんか？」

私が恐る恐る尋ねると、久宝さんが苦笑する。

「ああ、そうでした。あの日は、父と談笑するあなたを、初めてこの目で見ました。そして、父の言う通り、若いのに落ち着きがあり、とても可愛らしい方だと思いました」

「……そう……ですか……？」

あまり何度も可愛いと言われると、妙な警戒心が働く。何故だか、相手の言うことを素直に受

け入れられない。

私は無意識に、自分のガードを固める。しかし、彼の話にはまだ続きがあった。

「席を外した時、偶然休憩室であなたと同僚の女性が話をしているのを聞いてしまいましたね。確か、結婚祝いをどうするか、といったことを話していたと記憶しています」

「……はい。確かにそういう話をしていたかもしれません」

ちようどその頃、同僚の男性が結婚することになり、香山さんと二人で結婚祝いに何を贈ろうかと話し合ったことがあった。

「そこであなたは、『結婚するくらいなら一生一人がいい』と仰っていた。それが聞こえた瞬間、私はその場から動けないほどの衝撃を受けたんです」

「衝撃？」

「この女性と結婚したい、と、強く思いました。まあ、簡単に言えば一目惚れのようなもの、ですね……」

まったく予想もしていなかったお見合い話があった理由に、私は戸惑いも露わに彼と視線を合わせた。

「は……？ どうしてそうなるんですか!？」

「それまで私も、結婚する気などまったくなかったからです。好ましいと思った人が、自分と同じ考えだったことが大きな理由だと思います」

涼しい顔で言い放つ久宝さんに、私は目をパチパチさせる。

「ええ？ まさか……久宝さんのような方が、結婚願望がない!? そんな、見るからに、ものすごく女性にモテそうな方なのに……」

素直に思ったことを口にしたら、久宝さんが楽しそうにクスクス笑う。

「褒めてくださりどうもありがとうございます。でもね、だから、なのですよ。なんせ物心ついた頃から、私に近づいてくる女性は皆、私ではなく、私の後ろにある久宝家に魅力を感じてる方ばかりでしたから」

久宝さんの表情が若干曇る。そんな彼につられて、私まで神妙な顔になってしまう。

「女性が結婚相手に求めるのは肩書きや家柄。そこには愛など存在しない。私はずっとそう思って生きてきたんです。結婚式で夫婦が愛を誓う場面があるでしょう？ 私からすれば、あれは滑稽以外の何物でもなかった」

大企業の創業家で資産家。そんな家に生まれた彼には、私みたいな庶民には理解できないような苦労がたくさんあるのだろう。それは理解できる。けれど……

納得いかないことがあつて、思わず軽く手を上げた。

「あの、ちょっといいですか？ どちらも結婚する気がないのに、どうして今回のようなお話になったんでしょう……」

「そこなんです」

彼はお茶を一口飲んでから、私と視線を合わせてくる。

「実は、まるで結婚する気のない私に、周囲が無理矢理見合いをセッティングしてくるのをどうしようかと思っていたのですが、あなたの話を聞いた時ひらめいたんです。あなたのように、最初から結婚に夢も理想も抱いていない方との結婚なら上手うまくいくんじゃないか、と。元々結婚願望のないあなただったら、私の後ろ盾や肩書きなど気になさらないでしょう？」

理由を知り、ますますわけが分からなくなる。

「な、なんでそうなるんですか？ 私は、一生結婚する気はありません。その時、お聞きになったんですよ？」

彼にちゃんと伝わるよう、ゆっくり、はっきり説明した。しかし彼は、理解しているのかどうか分からない微妙な表情を浮かべたままだ。

私の中にだんだんと暗雲が立ちこめてくる。

マズいぞ。

このままでは結婚を前提に……という流れになってしまいそうな気がする。

私は慌てて久宝さんに両方の手のひらを向け、全身で「無理」とアピールする。

「私が結婚をしたくないのには、ちゃんと理由があるんです。軽い気持ちでしたくないと言っているわけではありません。揺るぎない根拠がちゃんとあります」

すると久宝さんが身を乗り出し、興味深そうに尋ねてくる。



すよ？ 高卒の事務員である私と結婚なんて、ご家族や周囲が納得するはずがありません」

これに対し、すかさず久宝さんの声が飛んでくる。

「ご心配には及びません。そもそも、あなたを私に勧めたのは父ですし。何より両親は私以上に苦勞してきたのでね。私が本当に結婚したいと思って連れてきた女性なら、どんな方でも大歓迎だと常々言っております」

心配無用、と微笑む久宝さんに、私は無言でおののく。

——これは……本気でヤバくない？ このままだと、本当にこの人と結婚なんてことになりかねない……！

「で、でも、やっぱり私には無理だと思います。さつきもお伝えした通り、そもそも男性といることが苦手ですし……」

「宗守さん、この食事は美味しいですか？」

急にまったく関係ないことを聞かれ、はっ？ と変な声を出してしまった。

「え、ええ……とても美味<sup>おい</sup>しいです……」

「もし、あなたが言うように、男の私といることを嫌だと思っているのなら、一刻も早くこの場を立ち去りたいと思うはずですよ。とても料理など味わう余裕などないでしょう。でも、そうではな<sup>い</sup>」

「そ……それは……」

確かに久宝さんの優しい雰囲気と一緒にいて嫌じゃない。食事を食べる所作も綺麗だし、近い距離で食事をしてもまったく嫌な気は起こらない。

しかし、だからといってこの人と結婚できるかはまた別の問題だ。

「でも、私は……母みたいになりたくないんです……」

思わず、本音が零れ出る。そんな私へ、久宝さんが静かに言った。

「あなたとお母様は違います。むしろそういうお母様を見てきたからこそ、別の道を選ぶことができるはずですよ。それにあなたは、何故お母様が何度も結婚と離婚を繰り返すことになるのか、その理由が分かっているのでは？」

ズバリ言い当てられて、黙り込んだ。

久宝さんの言う通りだ。結婚と離婚を繰り返す一番の理由は母の惚れっぼさだが、恋愛が上手<sup>うま</sup>くいかない理由は相手に依存しがちな母の性格によるものだと思っている。

だからこそ、私は男性に依存しない、絶対にしたくないと思っていた。

「……確かにそうですが、でも……」

私との結婚を望んでくれる久宝さんには申し訳ないが、やはり私には結婚など考えられない。

——どうしたらいいの。どうするのが一番いいの……

勤務先の取引先の重役であるこの人の気分を害さず、穏便に断るにはどうしたらいいのだろう。文字通り頭を抱えなくなったその時、久宝さんが口を開く。

「でしたら、試してみますか？」

そう、問いかけられた言葉に、私は静かに顔を上げた。

「……試す？ 何をですか……」

「いろいろと、ですよ。このままここで言い合っていたってキリがありませんし。物は試し、と言うでしょう？」

私を見て、久宝さんが居住まいを直し、ジャケットの襟えりを直す。

「宗守さん。一度、ひと通り試してみるのはいかがでしょう」

——試す……？ それって……デートでもして男に慣れろと言うのだろうか。

「試す、だなんて。久宝さん相手にそんなこと、できません」

「私はまったく構いません。あなたの気持ちを变えることができるのなら、なんだつてします」

「……でも……」

とはいえ、彼の言うことにも一理あるような気がしてきた。端はなから無理だと決めつけるのは、確かに相手に対して失礼な気がする。

「……試してみても、やっぱりダメだった場合は……？」

おずおず尋ねてみると、彼は寂しげに目を伏せた。

「その時は仕方ありません。ご縁がなかったと諦めます」

それを聞いた私は、額ひたいに手を当て視線を彷徨さまよわせる。

——つまり、一度久宝さんとデートをしてみても、ダメならこの話は断つてもいい……

私は一度深呼吸をして、久宝さんと目を合わせた。

「……分かりました。そのお話しというのを、してみます。ですが、それでダメだった場合は、このお話はお断りさせていただきます」

返事をした途端、久宝さんの顔がパツと明るくなり、目尻が下がった。

「ありがとうございます。よかったです。これでやっと食事に集中できます。宗守さんどうぞ、召し上がってください」

「はい」

こればかりは同意しかない。いくらすごい料理が目の前にあっても、話が終わるまでは食事どころではなかったのだ。これでようやく、料理を食べることができると。

箸はしを取り、一時間ほどかけて全ての料理を食べ終えた。

その間、久宝さんとは趣味の話や、仕事の話でそこそこ盛り上がったように思う。

食事を終え、店の前で改めて久宝さんと向き合い、お礼を言った。

「ご馳走様でした。こんなに素敵なお店や、お料理は初めてで緊張しましたが、とっても美味しかったです。今日はありがとうございます」

はつきり言っつてこの食事代がいくらなのかは分からない。しかし、恐ろしい金額なのは間違いないだろう。

内心で請求金額にビクビクしていると、久宝さんが涼しい顔で会計を済ませてくれた。

『今日は私に払わせてください。あなたとの初めての食事の記念ですから』

そう言ってくれたので、ものすごく恐縮しつつ、お言葉に甘えさせてもらった。

「いえ、私こそ来ていただいてお礼を言わなくてはいいけません。取引先という立場を利用して強引に見合いを申し込んでしまい本当に申し訳なかった。ですが、私は真剣です。そのことだけはどうか分かっていただきたい」

「それはもう、充分、分かりましたので……あの、それでお試しはいつにしましょうか？」

お試しデートをするのなら、そう遠くないうちに予定を入れておいた方がいいのではないか。

そう思った私がスマホを取り出し、スケジュール管理アプリを開いていると、久宝さんが満面の笑みで私を見つめてくる。

「準備がありますので、改めてご連絡を差し上げる形でもよろしいですか？ なるべく早めに連絡いたしますので。すみませんが、連絡先を伺ってもよろしいでしょうか」

「はい」

久宝さんの番号を確認して、私の番号も入れてもらった。

——それにしても、久宝さんの言った準備って、なんだろう……？

そう思いつつ、挨拶<sup>あいさつ</sup>をして別れる。

歩き出してしばらくすると、料亭の駐車場から黒い高級そうな車が出て行くのが見えた。

それを見送りながら、私はさつきまで一緒に食事をしていた男性のことを思い返す。

これまで私が会ったことがないような、上品で物腰柔らかな紳士。

彼のことを形容するなら、これがぴったり当てはまるなと思った。

——まさか私に結婚を申し込んでくる人がいるなんて……しかも、あんなにイケメンで社会的地位もある人が……

本当に世の中にはいろんな人がいるものだと感じる。

思いがけず見合いなどする羽目にはなったが、終わってみた率直な感想は、意外と男性とも普通に話ができたというもの。さすがにまた会うことになるとは思わなかったが。

——久宝さんかあ……強引だったけど、不思議と嫌な感じはしなかったな……

でも、私は結婚する気はない。彼の提案を受け入れることになったけど、次で最後だ。

そう自分に言い聞かせながら、私は生まれて初めての見合いを終え、帰路についたのだった。

週が明けた、月曜日。

いつも通り出勤して、自分の席に着いた時、勢いよく社長が事務所に飛び込んできた。

「宗守さん!? ちょ、ちょっといいかい」

明らかに尋常ではない社長の慌てぶりに、驚いて席を立つ。

「おはようございます。ど、どうかされたんですか……？」



何かトラブルでも起きたのだろうか。私に用があるということは、事務処理でミスがあったのかも……と不安が胸をよぎる。

すると社長は周囲に誰もいないことを確認してから、声を潜めて私に問う。

「いやどうもこうも……宗守さん、久宝さんとの縁談受けたって本当なのかい？」

「……え？ 縁談を受けた？ いえ、そういうことは……デートをする約束はしましたけど……」  
至って冷静に対応したつもりなのに、何故か社長の顔がパツと花が咲いたように明るくなった。

「デートの約束をしたのか……!! いやね、たった今久宝さんから直々に連絡をもらったんだよ。君のことを素晴らしい女性だった、是非この縁談を進めたいと仰っていて……ほ、本当ならすごいことだよ！ あの久宝家の御曹司と宗守さんが結婚だなんて、私は……私は嬉しくて……」

あろうことか社長は目に涙を溜め、鼻を吸りだしたのでギョツとする。

「え、あ、あの、社長、待ってください！ 私、この縁談を受けるとは一言も……」

何か誤解をしている様子の社長に、きちんと説明しようとした。だが、社長は私の話を聞かず、溢れる感情を抑えきれないといった感じで早口で捲し立てる。

「いやあ、一生二人でいいと言っていた宗守さんが……きつと日頃の行いがいいからだろうなあ……結婚式に呼んでくれると嬉しいんだけど」

「いや、あの……社長、ちょっと待ってください」

結婚する気はありません。

この言葉が喉まで出かかる。でも、目の前でこんなに喜んでくれている社長に事実を話していいものか、迷いが生じた。

私の心臓が、急激にドクドクと脈打ち始める。

「社長、あの……ま、まだ結婚するかどうかは未定なのです。なので、誰にも話さないでいただけますか？ い、一生のことですし、私としてもっと時間をかけて慎重に決めたいと思っているので……」

どうにかこうにか浮かんできた言葉でこの場を落ち着かせる。それを聞いた社長は、笑顔でウンウンと頷いていた。

「ああ、それがいいそれがいい。二人でゆっくり決めたらいい。この話は、私の胸の内に留めておくから、安心してくれ」

「ありがとうございます。あの、久宝さんに確認の電話をしてきてもよろしいでしょうか」

「いいともいいとも。始業時間まではまだ時間もあることだし、よろしく伝えてくれな」

社長が笑顔で事務所を出てすぐ、私は慌ててバッグの中にあつたスマホを手にする。そのまま事務所を飛び出し、工場の裏手で久宝さんに電話をかけた。

ここなら誰にも電話の内容を聞かれないはず、と周囲を気にしながらスマホを耳に当てていると、三コールもしないうちに彼の声が聞こえた。

『はい。宗守さん？』

久宝さんの声はこの前と同じように、落ち着いていて、慌てている様子はまったくない。

「お忙しいところ申し訳ありません、今、お時間よろしいですか」

『どうぞ。構いません』

「久宝さん。今、社長からおかしなことを言われたんですが。なんか、私が久宝さんとの縁談を受けた、みたいになってるんですけど……あれは、うちの社長の勘違いですよ？」

『いいえ』

はい、と返ってくると思っていた返事は、まったく逆のものだった。

「……あの、今、久宝さんなんて……」

『弘田社長には、宗守さんとの見合いが上手くいったとお伝えしました。実際、私達はこれからひと通り試し、それから今後の判断をするんです。現状、上手くいつているで間違いなのでは？』

私は後頭部を鈍器で殴られたようなショックを受ける。

確かに、私達の関係は進んでもないが終わってもいない。だが、どう考えても上手くいつているは言い過ぎだ。

「だからって、上手くいつているなんて言ったら、まるで私達が結婚するみたいに聞こえるじゃないですか。ちゃんと事情を説明した方がいいと思うのですが」

『ひと通り試すことを、ですか？』

そう切り返してきた久宝さんに、私は妙な違和感を抱く。

——久宝さん、さつきからひと通り試すって言ってるけど……

考えてみれば、お見合いの席でもそんなようなことを言っていた気がする。

はつきり言って、嫌な予感がした。

「久宝さん、あの……ひと通りって、なんのことですか？」

『言葉の通りですが。デートからもし私達が結婚した場合のシミュレーションまで。つまり、結婚生活を実際に体験してみることです』

「はあッ!？」

驚きのあまり、後ろにある工場の内部にまで響いてしまいそうなほどの大声を出してしまった。すぐにマズいと思い、慌てて声のボリュームを落とす。

「まままま、待ってください!! 私、デートをすることは承諾しましたが、結婚生活を試すなんてひとっ言も聞いていません!!」

『おや? でも、あの時私は、一度、ひと通り試してみても、と提案しました。宗守さんはそれに同意してくださいましたよね?』

「……そ、それは……」

——確かにあの場では同意したけど……でも普通、「ひと通り」というワードだけで結婚生活まで想定しないよね!? 私がおかしいんじゃないよね!? 久宝さんの言っていることが規格外過ぎるんだよね!?

動揺と混乱で、おそらく私の顔は強張<sup>こわば</sup>っていたと思う。しかし、そんな私とは裏腹にスマホから聞こえてくる久宝さんの声は、変わらず淡々としていた。

『……困りましたね。あなたが同意してくれたので、すでに新居となる自宅へ業者を入れて、クーリーニングを始めているところなんですよ』

それを聞き、驚きすぎて口から心臓が出るかと思った。

——準備ってそのこと!!

「新居!! まさか……い、一緒に住む、ということですか!? 私と久宝さんが!? 二人きりで!」  
『ええ。あ、でも家事をしてくれている通いの家政婦さんがいますので、厳密には二人きりというわけでは……』

「そんなことを聞いているのではありません……!! む、無理です。いくらお試しだからって、男性と一つ屋根の下で暮らすなんて……とんでもないですっ!」

すると、電話の向こうで久宝さんが数秒沈黙する。

『でも、実際に一緒に生活してみないと上手<sup>うま</sup>くいきかないの判断はできませんよね。一緒に生活してみた上で私とはやっていけないと判断されたなら、諦めるしかありませんが、一度デートをしただけで合わないとは判断されるのは、こちらとしても納得いかないもので』

「そんなこと言われても……」

これはもう、謝るしかない。

勘違いでした、やっぱり結婚はできませんとはつきり言うべきだ。そうでなければ絶対に後々面倒なことになる。

私は胸に手を当て呼吸を整えてから、一気に謝罪の言葉を口にした。

「申し訳ありません。久宝さん、私、勘違いしておりました……お試しデートくらいなら、と提案を了承しましたが、一緒に生活をするとなると話は別です。どう考えても私には無理です。なので、今回の話はなかったことにしてください」

しかし、この思いは通じなかった。

『生憎<sup>あいにく</sup>ですが、なかったことにはできませんね。それに、勘違いでも構いません。謝らなくていいので、とにかく私と一緒に生活してみてください』

その返答を聞いて体がふらつき、後ろに倒れそうになる。

「ちょっと待ってください。本当に無理です……」

話の通じない相手を納得させるにはどうすればいいのか。私が必死で考えを巡<sup>めぐ</sup>らせていると、スマホから優しい声が聞こえる。

『ああ、それとこれは拓田社長からは内緒にしてほしいと言われていたのですが、実は宗守さんには、他にも数件縁談の申し込みが来ているそうですよ』

「……………は? な、なんですか、それは……私、そんなこと一言も聞いていませんけど……」

『拓田社長のご友人の息子さん達らしいですが、今回私との縁談が浮上<sup>うわ</sup>したことで、他の方々は諦

めてくださったようですね。ですが、私との縁談を断れば、確実に次の縁談があなたに舞い込んでくることになるでしょうね」

初めて聞く話に、更に頭が混乱する。けど、ここで怯んだら負けだ。私はなんとか気持ちを奮い立たせる。

「私は絶対に誰とも結婚しません。一生一人で生きていくと決めているんです。社長もそのことはご存じですので、たとえ縁談が来ようと同様ありません。断っていただくだけです」

『それはどうでしょう？ 払田社長は人がいいですからね、今までは断ることができたかもしれませんが、一度私との見合いを受けてしまった以上、他の方からの話を断るのは難しいのではないのでしょうか』

「そ……それは……」

『ですが、ここで私との縁談を形だけでも進めておけば、あなたは当面の間、縁談を回避することができますよ。私とお試し結婚生活をするか、他の方とも見合いをするか。あなたの好きな方を選んでください』

「そんな……」

——何この久宝さんに都合のいい展開は……

最初に彼に感じた、物腰の柔らかな紳士というイメージが、ガラガラと崩れていく気がした。

この人、こういう流れになることを端から分かっていただけでは？ そんな疑念を抱かずにいられない。

ない。

そもそも、見合い話からして断ってもいいという前提で引き受けたはずが、いつの間にか次の約束を取りつけられて、気づけば外堀を埋められている……

「久宝さん……あなた、最初から私との縁談について、引くおつもりはありませんね？」

『察しがいい女性は好きですよ。そうです。私は、なにがなんでもあなたと結婚したい。そのためには、策を惜しみません』

「ひ……卑怯です！ あなたのそのような立場の人にそんなことをされたら、私みたいな立場の人間は抵抗できないじゃないですか」

『抵抗してくださって大いに結構ですよ。宗守さん、私はね、三十二年の人生で女性を追いかけるといのが初めてなので。ですので今、この状況にもものすごく興奮していますし、楽しくて仕方がありません』

なんてことだ。紳士なんてとんでもない。物腰の柔らかさにすっかり騙されてしまったけど、この人はとんだ食わせ者だ。

「あなたは社会的には地位のある人ですけど、男としては……最低ですね」

精一杯の憎まれ口を叩いてみたものの、スマホの向こうからは楽しそうな笑い声が聞こえてくる。『ええ。それは自分でも重々承知しています。でも、私はあなたを服従させたいのではない。あくまで、一緒に幸せになろう、という提案をしているのです。そこだけは間違えなくてください』

——一緒に幸せになろう、ねえ……

今更、何を言われても信じられないし、ため息しか出てこない。こうなったら、お試しでもなんでもして、早々に私と一緒にでは幸せになれないと気づいてもらおうしかない。

それしか、この人との結婚から逃れる方法はないのだと悟った。

「……分かりました。ですが、あくまでお試しですから。無理だと思ったら、遠慮なく終了させていただきますので、それだけはご理解ください」

強めのトーンで断言すると、すぐに『分かりました』と返事があった。

『一緒に生活してみても合わないようであれば仕方ありません。その時は、約束通り諦めます。ですが、私は全力であなたを愛しますので、その覚悟だけはなさってきてくださいね』

全力であなたを愛する。

そんな漫画みたいな台詞を現実で言ってくる男性がいるなんて思わなかった。

途端に耳や顔が熱を持ち、熱くてたまらなくなる。

「……ぜ、全力で……どんなですか……」

『そのまま受け取っていただいて結構です。こう見えて私の愛は重いと自負しておりますので』

「それは……あまりいいことではない……」

『ふふ。では、準備が整い次第またご連絡いたします。……楽しみにしてくださいね』

意味ありげな最後の言葉に、心臓がどくん、と跳ねた。

通話が切れ、私はスマホを持って腕をだらりとさせる。

——な……なんなの。この人……

物腰柔らかな紳士の仮面を被った、とんだ策士、久宝公章。

私は、とんでもない男に好かれてしまったのかもしれない。そう思った。

### 三

久宝さんとのお見合いから二週間ほど経過した週末。

私は十年間住んでいるアパートでスーツケースを前に時計と睨めっこしていた。というのも、つい先日、久宝さんからお試し結婚生活をする住居の準備が整ったと連絡があったからだ。

私が住んでいるのは、築年数の古い二階建てのアパート。十年前、就職が決まり祖父母に保証人になってもらいここに住み始めてからは、ここが唯一私の心安まる場所だった。

そんな場所から一時的とはいえ、離れる日がやってこようとは。

部屋の中を見回しながら、私は急激に変化した状況にため息をついた。

本当なら数回デートをしてからお試しの結婚生活に入る予定だったらしい。

しかし、のんきにデートなんかしている時間ももつたらないと、私から同居を申し出た。私としては、一刻も早く久宝さんにこの縁談を諦めてもらいたいのだ。

その一心でお試しデートをすつとばし、お試し同居生活を始めることにしたのである。

『生活に必要な物はほとんど揃っているので、あなたが必要な物だけ持ってきてください』

久宝さんの言葉を信じ、昨夜のうちに着替えや化粧品などの最低限必要な物だけをスーツケースに詰め込んだ。

大家さんには、しばらく部屋を留守にすることを報告してある。全ての準備を終えた私は、こうして久宝さんが迎えに来てくれるのを待っているのだった。

ぼんやりと床に座り込んだ私は、水筒に入れたお茶を口に含む。

——それにしても、まさかこんなことになるなんて……

自分で決めたこととはいえ、私が結婚生活を体験することになるとは。こんなこと社長や香山さんが知ったら、本気で腰を抜かしそうだ。二人にはなんとしてもこの事實は隠し通さなければ。

それともう一つ、気がかりなのは母だ。

別々に暮らして十年になるが、母はごくたまになんの連絡もなくふらりとアパートにやって来る。その時、私がアパートにいれば問題は無いが、もしいなかった場合、あの人はアパートの隣にある大家さんの自宅へ行ってしまうのだ。一応大家さんには、母が来ても何も言わないようお願いしたが、母が私の行動を怪しんで、毎日のようにアパートに来るかもしれない。そうになると、私がし

ばらくアパートを留守にしているのがバレてしまう。

もちろん実の親なのだからバレても問題はない。しかし、とにかく恋愛至上主義な母のことだ。

私が久宝さんという高スペックな男性と見合いた上、一つ屋根の下で暮らしているなど知った日には、きつと今すぐ結婚しろともものすごい圧をかけてくるに違いない。

それはもう、息をつかせぬほどの猛烈な圧を。

それが分かっているから、母には久宝さんとのことを知られたくないし、知らせない方がいいと思っている。

——なんせ昔から私に、結婚はいいわよー！とか恋しないなんて勿体ない、とか熱弁を振るってきたからな……

ため息をつきつつ、スマホにメッセージがきていないかをチェックしていると、時刻はもうじき午後一時。久宝さんが迎えに来ることになっている時間だ。

スーツケースを玄関まで運び、外に出ようと靴を履いていると、約束の時間ぴったりに久宝さんからの着信があった。

画面に出た名前を見つめ、ひと呼吸置いてから、通話をタップした。

「はい……宗守です……」

『久宝です。出発の準備はできていますか？』

スマホから聞こえてきた穏やかな声に、つい顔が引き曇る。

なんでもないような口調で尋ねられたが、こっちは昨夜から緊張してろくに眠れていない。そんな私の心情を、この人は分かっているのだろうか。

私は久宝さんに悟られないようため息をついて、通勤で使っているバッグを肩に掛ける。

「準備できてますよ。どうすればいいですか？ アパートの外に出てお待ちしていればいいですか？」

『いえ。今あなたの部屋の前にいますので、ドアを開けてくだされば』

それを聞いて、ひゅつと喉が鳴った。

「ま、前!？」

慌ててドアを開けると、耳にスマホを当てて微笑む久宝さんがいた。

「こんにちは宗守さん。今日は良いお天気で何よりですね」

お見合いで会った時と同じように三つ揃いのスーツをパリッと着こなし、美しい顔で微笑む紳士……いや、策士の登場だ。

——い、いつの間に……足音とか何も聞こえなかったよね？ 気配を消せるのか、この人は……  
怯みそうになりながらも、どうにか背筋を伸ばす。

「こんにちは……もしかして時間になるまでずっとここで待ってたんですか？」

スーツケースを部屋の外に出しながら久宝さんを軽く睨むと、クスッと笑われる。

「来たのはほんの二、三分前ですよ。さ、荷物をこちらに」

四、五日の旅行に適した大きさのスーツケースを、言われるまま彼に渡した。

「……しばらくの間、お世話になります」

しっかりと頭を下げると、久宝さんはこちらこそ、と小さく首を傾げた。

「もつと肩の力を抜いてください。なにせ私達はこれから夫婦になるのですから」

サラッと言われ慌てて周囲を確認した。とりあえず、周囲に人はいない。

「ちよっ……!! こっ、こんなところでそういうこと言うのやめてください!! 誰かに聞かれたらどうするんですか!!」

窘めると、一步踏み出した久宝さんが立ち止まって振り返り、肩越しに視線を送ってくる。

「聞かれたら聞かれたで、事実にしてしまえばいいので私としては好都合なのですが」

「……そ、それは……」

「まあ、それはひとまず置いておきますか。では、行きましょう」

「……はい」

もう文句すら言う気になれない。

私はひっそりとため息をつき、彼の後に続いた。

外付け階段をカンカンと音を立てながら下りると、アパートの前に黒塗りの国産高級車が駐まっていた。これはこの前、料亭で見たあの車だ。

——やっぱりアレ、久宝さんの車だったんだ。

我が社も部品を製造している国産自動車メーカーの高級SUV。広々としたラゲッジスペースにスーツケースを入れ、私は彼に促されて助手席に乗り込んだ。

「お邪魔します……」

「どうぞ。座席はお好きなように調整していただいて結構です」

と言われても、こんな高級車に乗るのは初めてで、どこをどう弄ったらいいのか分からない。うちの会社の社用車についている座席の位置やリクライニングを調整するレバーも見当たらないし。

仕方なく、運転席に座った久宝さんに声をかけた。

「あの、これってどこをどうすれば……」

「ああ。これはですわね」

久宝さんが一度装着したシートベルトを外す。

「少々失礼します」

「えっ……」

戸惑う間もなく、久宝さんが身を乗り出してくる。そして長い腕が私の体の上を超えて座席の横にある何かを弄ると、座席が前にゆっくりと動き出した。

「位置はこれくらい？ もっと前？」

「あつ、は、はい。これで、大丈夫です……」

「リクライニングはここです」

久宝さんが実際操作をしながら教えてくれる。だけど、今の私はそれどころではなかった。

男性が滅茶苦茶近くにいることに体が強張り、顔を上げることができない。

——ひー、近い近い……っ!! しかもなんかいい匂いがするっ……!!

「宗守さん？ どうかしましたか」

体勢を戻しながら、久宝さんが私の顔を覗き込んでくる。

——思いつき体が逃げているの、バレたかな……

「いえ……ありがとうございます」

「はい」

私がシートベルトを装着したことを確認すると、久宝さんは静かに車を発進させた。

幹線道路に入り車が流れに乗ると、さっきの動揺が多少は治まってくる。

それにしても、急に体が近づいてきたのには驚いてしまった。

——久宝さん、すごくいい匂いがしたな……なんの匂いだろう。香水？ それともシャンプーとかなだろうか……？

決して彼を異性として意識しているわけじゃない。だけど、あまり男性との接触に慣れていないからか、どうしても距離が近いと緊張して体がガチガチになってしまう。それは久宝さんがイケメンだからとかではなく、男性なら誰に対してもそうなってしまうのだ。

——最近男性と接触することがほぼなかったから忘れてたけど、やっぱり私、何年経っても男性



が近くに来るとダメだな……

やはり私は結婚に向いていない。そう、つくづく思い知らされた。

「宗守さん」

「はっ！ はい!!」

ふいに声をかけられ、弾かれたように久宝さんを見る。

「これから向かうのは私の自宅ですが、先日ご説明申し上げたように、住んでいるのは私だけです」

久宝さんが片手でハンドルを握りながら、淡々と説明を始めた。

「あと、通いの家政婦さんがいらっしやるんでしたっけ？」

「ええ。佐々木さんという年配の女性です。お世話になってもう十年近くになります」

頭の中で家政婦さんの姿をイメージする。十年も通い続けているということは、久宝家の皆さんから相当信頼されている方に違いない。

「だけど、どうして久宝さんは一人で住んでいるのだろうか？ ご両親は健在のはずだけど……」

「あの、一つお伺いしてもいいですか」

「はい。なんなりと」

「一緒に住んでいない、ということは久宝さんのご両親はどちらにいらっしやるんですか？」

「近くに住んでいますよ。私が今住んでいるのは別宅の一つなんです。久宝家には本宅以外に別宅

が三つと、別荘が国内に四つほどあるので。現当主である父が住む本宅は、私が住む別宅から数キロ離れた場所にあります」

なんでもないことのように話す久宝さんを前に、私は口を開けたまま呆然とする。

——次元が違いすぎる……

「す、すごい……ですね、さすが……」

「でも私は、そんなに必要ないと思ってるんですけどね。両親の許可が出れば、いくつか処分したいくらいなんです」

「えっ、なんでです？ どのお宅も歴史のある立派な建物なのでは？」

「そうですが、ただ置いておくくらいなら、市や町に寄贈するなり、建物を何かに利用してもらった方がいような気がして」

なるほど。それは確かに。貧乏人の私もそう思う。

「確かに、そういう考え方もありますね。今は古い建物を利用した古民家カフェとかも流行っていますし……」

「ええ。一度そういう場所に行ったことがありますして、うちの別宅もこういう風に使ってもらえたらいいんじゃないかなと。ですので、私の代になったら実行しようと思っています」

「久宝さんって、ご兄弟はいらっしやるんですか？ あっ、すみません。質問は一つ……と言ったのに……私ったら図々しいですね……」

何気なく質問した後に、さつき自分が言ったことを思い出した。しかし久宝さんは、ちらっと私を見ると、楽しそうに頬を緩めた。

「いくつ聞いてくださっても構いませんよ。兄妹は、妹が一人おります。もう嫁に行きましたが」「そうなんですか。おいくつで結婚を?」

「えーと、二十二……か三、だったかな? 大学を卒業してすぐ、学生時代からお付き合いしていた方とあっさり結婚してしまいました。その時は、父が随分落ち込んでいたのを覚えていますよ。で、宗守さんはご兄弟は?」

私は前を見たまま、静かに首を横に振る。

「いません。一人っ子です。母は何度も結婚したのに、子供は私だけなんですよね……」

「それは、もしかしたらお母様なりに宗守さんに配慮されたのでは……?」

「いえ、それはないかと……私に配慮してたなら、あんなにホイホイ結婚と離婚を繰り返したりしないと思いますし……」

「そうでしょうか。まあ、その辺りはいつか宗守さんのお母様に直接聞いてみたいところではあります……あ、もうすぐ到着します」

思い出したように言われて、背凭れから体を起こす。

窓から久宝邸らしき建物を探していると、車は幹線道路から住宅街に入っていく。一軒一軒の敷地がやけに大きな家が建ち並ぶ中、久宝さんはある建物の前でハザードランプを点滅させながら車

を駐めた。塀の奥にチラツと見えているのは要塞のようなコンクリートの建物で、家の前には私の身長くらいの高さはあろうゲートがある。

「今、ゲートを開けますね」

彼がどこから取り出した小さなリモコンを操作すると、ガタンという音と共にモーターの動き出す音がして、ゲートがゆっくりと開き始めた。

全て開いたところで久宝さんが再び車を発進させ、家のポーチ付近に車を横付けにした。

家自体もこんなに大きいのに、更にもう一軒家が建てられそうなほど大きな庭もある。別邸ということだけど、敷地だけでも相当の広さがあるに違いない。

あまりのすごさに呆気にとられていると、久宝さんがシートベルトを外した音が聞こえた。

「着きましたよ。今、荷物を下ろしますね」

「あ、ありがとうございます」

先に車を降りた久宝さんに倣<sup>まね</sup>って私も車を降り、今自分の目の前にある大きな邸宅を見上げる。コンクリート打ちっぱなしの硬質な外観に、細く横長の窓と縦長の窓がいくつか。

色味はシンプルだけど、モダンでスタイリッシュな外観に、胸がときめく。

——わ……素敵な家……

社会人になってからは、ほとんど友達と呼べる人がいないので、誰かの家に行くというのがそもそも十年以上ぶり。しかも、こんなに大きくてお洒落な家は初めてだ。